

「 日口の未来は実業 」 (協同組合通信/ 日和見論弾) 16.5.12

何かとニュースや話題の主の赤い大国中国は経済過熱気味。一方の雄、隣国ロシアの最近の外交が良い。エリツィン氏から禅譲された時、KGB 出身者の、どこか冷たく暗い印象を受けた未完のプーチン大統領。

北朝鮮問題、6 カ国協議やイラク戦争に見せる、確固とした独自外交は、某国首相とは物が違い頼もしい。風格さえ漂わせ、国内での評価も夙に高まり、史上初の三選もありやと、ロシアの新しい指導者像を確立しつつある。

ロシアといえば、江戸時代に二人の傑物。アムチトカ島に漂着し、長期の抑留に耐え、艱難辛苦の末、エカテリーナ女帝に謁見を許され、10 年後に帰国したが埋もれた大黒屋光太夫。

もう一人。淡路島の百姓の子に生まれた高田屋嘉兵衛。

18 の時一念発起し、大坂で船乗りとなり、27 歳で箱館を母港とした海運業を開始。稀有な商才を幕府に認められ、千島方面への航路開拓。択捉島や釧路沖に漁場を開き、世界最大の北洋漁業隆盛の礎を作り、巨万の富と名声を得た。

一方で、私利私欲少なく、防災ボランティア活動の先駆者。分化三年(1806)の大火には、気風良く私財を投じ、被災者への生活物資の提供。防災の為に井戸を掘り、ポンプを寄贈するなど獅子奮迅の働き。

特筆は、民間大使としての日露外交の功績者。19 世紀初頭、ロシアの南下政策に対抗しうる海軍力のなさを自覚し、時の幕閣は神経を尖らせていた。分化八年(1811)に起きたゴローニン事件で、日露の一触発の危機に活躍。ロシア代表リコルド少佐にも全幅の信頼があり、国後島で幕府の書簡を手渡した。これが現存している両国最古の公式外交文書。

正に、国際商人としての人望と肝っ玉及び才能が開花し、日本の危難を救い、日露和親条約締結の伏線。函館市宝来町に、その功績を称える銅像が、湾の向こうを見据えどっしりと立つ。

高田屋の事跡を学び、北海道を拠点とする新しい日口の農業・漁業を中心とした広範な連携事業の好機到来。開明的指導者プーチンの胸に飛び込み、北方領土問題の解決にも、冷静に全力を傾ける実業家の出番が迫っている。

(気象情報システム株式会社 高 津 敏)